

---

# 第一章 黒き襲来者

男の娘

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

第一章 黒き襲来者

### 【Nコード】

N1389BA

### 【作者名】

男の娘

### 【あらすじ】

さなかやたはあかなたな

**(前書き)**

たぬはたはたひたはたはてははたひたはたはたはたはつはてはたは  
たはちはとはたはたはたはたはたはて

「全員揃ってますねー。それじゃあSHR始めますよー。」  
ショートホームルーム

どうも、結渡です。

今日は、IS学園入学式の日です。

ちなみに、中学の卒業式からずっと徹夜だったから、昨日は1日寝てました。

今は入学式が終わって、山田先生が話しています。  
相変わらず子供みたいな先生ですね。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね。」  
「……………」

今、教室は異様な雰囲気に包まれていて、誰からも返事がない。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号で。」

出席番号かじゃあ箒ちゃんの後か。

それにしても、六年でこんなに綺麗になるもんだな。

それより、視線がすごいな。

まあ、それもそうだな、クラスのぼくと一夏以外が女子なんだから。

さらに、ぼくは公表されてないし、女の子みたいだし。

馴れててもまあ、これはつらいな。

あつ、次一夏だ。って、一夏ボーツとして気づいてない。

「織斑君織斑 一夏君っ。」

「は、はいっ!？」

いきなり名前を呼ばれで驚いてるよ。

周りの女子からは、クスクス笑い声が聞こえる。

「あつ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい、お、怒ってる？怒ってるかな？ゴメンねゴメンね！でもね、あのね？自己紹介、『あ』から始まって今『お』ね織斑君なんだよね、だからねご、ゴメンね？自己紹介してくれるかな？ダメかな？」

あーあ、一夏が先生に迷

惑掛けてるよ、っていうかこの人本当に大人か？

「いや、あの、そんなに謝んなくても……っていうか自己紹介しましから、落ち着いてください。」

「ほ、本当？本当ですか？本当ですね？や、約束ですよ、絶対ですよ。」

山田先生が、一夏の手を取って詰め寄っている。すごい注目されている。

一夏は、後ろを向いた。少し引いてる。やっぱり視線を直に見ると

怖いよな。

篝ちゃんは、一夏をチラチラ見ては、何か呟いてる。

「えー……えっと、織斑　一夏です。よろしくお願いします。」

おー、出だしは上々。

さあ次は、あれー、なんか困ってる、まさかネタ無し！

あつ、こっち見た。止めて助けを求めないで。

なんか覚悟を決めた一夏は、深呼吸した。

「以上です。」

がたたつ、思わずずっとこける女子、ひっくり返り腹を抱えるぼく。

「あ、あのー……」

あつ、ヤバイ、魔王様がきた。早く直さなきゃ。

あつぶなかったー。

パンツ！

ふう、出席簿は回避した、これで安心。

「いっ——！？」

あーあ、ドンマイ。

叩かれた頭を押さえたまま、一夏は、恐る恐る後ろを向いた。

「げえっ、関羽!？」

パンツ!

あーあ、バカだろあいつ。

さらに、関羽じゃなくて、ドラ○エの竜○（第一形態）辺りだろ、いや、ハー○ン辺りか？

ブン！（千冬さんの出席簿が降り下ろされた音）

ヒュ！（ぼくが避けた音）

バコーン！（ぼくが殴られた音）

痛ってー。

「誰が三國志の英雄だ馬鹿者、そして、お前失礼なこと考えたろ。」

なぜわかった。くそいてー、それにしても久しぶりだな。

千冬さんがIS学園の教師  
になって以来かな。

「お、織斑先生、会議は終わられたんですか。」

「ああ、山田君。クラスえのあいさつを押し付けてすまなかったな。」

なにこのやさしさ本当に千冬さん？あっ、でもわたしにもこんな感

じか。

「い、いえっ。副担任ですから、これくらいはしないと……」

「諸君、私が織斑 千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。まあ一人、それが足りないやつがいるんだがな。まあ、私の言うことは良く聴き良く理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな。」

千冬さんは、相変わらずだなあ。

まあ、強いからいいけど。ぼくの武術の師匠だし。

あ、ヤバい、ハデスお願い。

（わかった。）

「キャー！千冬様本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」

いや別にどこからでもいいだろ。

外国からも来るんだから。

「あの千冬様にご指導頂けるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

最初の実際に受けたら嫌になるよ。

そして最後の人、命を粗末にしちゃダメだよ。



「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるもんだな。感心させられる。それとも何か？ 私のクラスだけに馬鹿者を集中させているのか？」

千冬さん多分後者だよ。

でもそんなにうっとうしがらなくても、人気は買えないんだから。もうちょつと優しくしようよ。

と思ったぼくが甘かった、一夏も同じようなことを思ったんだろう。そう、ケーキに甘いものをありったけ乗せたりかけたりしたぐらい甘かった。

「きゃあああああつ！ お姉様！ もっと叱って！ 罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躑をして〜！」

クラスメイト達が元気でなによりだ。

多分プライベートの千冬さんを見たらがっかりするよ。

それよりどういうことだよ、ハデスに聴力下げてもらって耳せんしたのに耳がいたい。

はあ、もういいや、

（ハデス解除していいよ）

（わかった）

はあ、耳がいたい。

「で？挨拶も満足にできんのか、お前は。」

そうだぞ全く、一夏のせいで後頭部が痛いんだよ。

「いや、千冬姉、俺は――」

はい死亡フラグ。

パンツ！

本日三度目の必殺出席簿アタック！

「織斑先生と呼べ。」

「……はい、織斑先生。」

良く考えたら、今姉って呼んじゃったよね、あゝあ一夏のバカ、  
また耳が痛くなるよ。

「え……？織斑君ってあの千冬様の弟……？」

「それじゃあ、世界初の男で『IS』を使えるっていうのも、それが関係して……。」

「ああっ、いいなあっ。代わってほしいなあっ。」

あれ意外と騒がなかった。

最後の人代わったら3日で、やめたくなるよ。

今一夏は、世界初の『IS』を使える男ということで、ここIS学園にいる。

IS学園っていうのは、簡単に言うと、

『日本人が作ったISで俺等混乱してるから責任もって人材管理と育成の学校作れや。その技術よこせや。あ、金は出さないから』

と言うことだ。

どうでもいいけど。

まあ、これはわたしの講義やら何やらで、少し改善されたけど。

そんなこと思っているとチャイムが鳴る。

「さあ、SHRは終わりだ。諸君にはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。そのあと自習だが基本動作は半月で体に染み込ませろ。いいか、いいなら返事をしろ、よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ。」

おー、酷いねー。

まったく基礎知識かー、半月は暇だな。

何しよう、紅椿の資料お姉ちゃんに送ってもらうかな。

「席につけ馬鹿者。」

それとも、あつ、GNドライブの調整でもするか。

終わったら、新装備でもつくるか。

第十話終わり

(後書き)

はてひ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1389ba/>

---

第一章 黒き襲来者

2012年1月3日14時45分発行